

垣根を越えよう

第24回 日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター

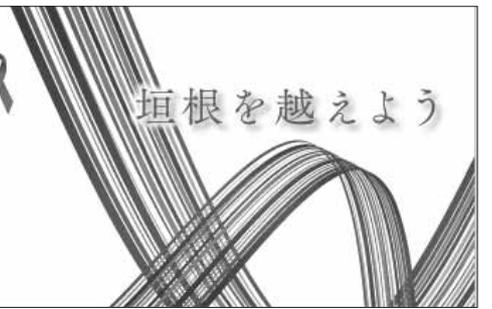
第4号

発行：2010年11月24日(水曜)

編集：第24回日本エイズ学会学術集会・総会ニューズレター編集班



垣根を越えよう



あなたの「垣根」は何ですか 第24回日本エイズ学会学術集会・総会開幕

専門分野にとどまらず、われわれの前にはいろいろな「垣根」が高く立ちはだかっています。心、人と人、国境、民族、人種、+と-、と、あなたの「垣根」は何ですか。
(岩本愛吉)

HIV感染者もエイズ患者も増加を続けるわが国の現状の打開を目指し、第24回日本エイズ学会学術集会・総会が今日11月24日(水)、東京都港区のグランドプリンスホテル高輪とザ・プリンスさくらタワーで開幕する。岩本愛吉会長が学会プログラムにおける挨拶でも指摘しているように、今学会の長い準備の過程で、問われてきたのは《いまここに紛れもなく存在し、乗り越えるべき「垣根」とは何だろう》ということであり、26日(金)まで3日間の会期中のプログラムおよび関連行事の中では、その問いに答えるべく意欲的かつ多様な試みがなされている。

釜山ICAAPへの参加、呼びかけられる

第1会場のグランドプリンスホテル地下1階「プリンスルーム」では、24日午前9時30分からの開会の辞に続き、来年8月26日から30日までの5日間、韓国の釜山で開かれる第10回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(ICAAP)の組織委員会を代表してミュンハン・チョウ副会長(韓国建国大学教授)が演壇に立ち、同会議への参加を呼びかける。また、アジア太平洋エイズ学会(ASAP)のザヒド・フセイン理事長の挨拶も予定されている。

釜山ICAAPのテーマは“DiverseVoices,UnitedAction”(多様な意見、結束した行動)。世界人口の6割を占めるアジア太平洋地域は言語、民族、生活習慣が多様であるだけでなく、HIV/エイズの流行の姿もまた多様である。来年のICAAPはその流行の多様性に対応すべく、多様な議論が交わされることを重視している点で大いに注目される一方、韓国にはHIV陽性者の入国規制がいまなお残っており、国際エイズ学会(IAS)や国連合同エイズ計画(UNAIDS)から政策の変更を求められるなど多様性をめぐる大きな課題も抱えている。

国連の潘基文事務総長が韓国出身ということもあり、釜山ICAAPはHIV/エイズとの闘いにおける大きな政策的試練を背負った会議ともいえそうだ。第10回アジア・太平洋地域エイズ国際会議については英文サイトが開設されている。

こうした課題も含め、来年のICAAPへの招待を開幕プログラムに掲げることで、24エイズ学会はまず、国境という大きな「垣根」の存在と、それを越えて協力することの大切さをメッセージとして明確に打ち出すことになる。

新導入のプレナリーセッション、いよいよ開始

分野を超える試みとして注目されるプレナリーセッション(全体会議)も24日午後の初日のセッションは、臨床から国際エイズ学会(IAS)のエリ・カタビラ理事長(ウガンダ)トロント総合病院のシャロン・ウォルムズリー博士(カナダ)の2人が途上国と先進国における治療の最前線について報告を行なう。また、基礎分野からは国立感染症研究所エイズ研究センターの武部豊博士による「世界からみた日本のHIV感染症の分子疫学」。そして、社会分野は日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスの羽鳥潤さんがHIV陽性者としての視点を踏まえ「東アジアにおけるHIV陽性者の治療アクセス」をテーマに報告を行なう。

プレナリーセッションは期間中、毎日開かれる予定で、基礎・臨床・社会各分野の専門家が、それぞれの分野の専門家以外の人に分かりやすく最新情報を伝える分野横断的セッションであり、初日はとくに、国際的な広がりの中で日本のHIV/エイズ対策の課題と今後の可能性をさぐる事が期待できる。また、HIV陽性者がプレナリーセッションで講演を行なうことは、GIPA(HIV陽性者のより積極的参加)原則の重視という観点からも重要な意味を持つものであり、わが国における今後のエイズ政策の方向性を考えるうえでも、貴重なセッションとなりそうだ。



3日間の議論と交流の会場となる高輪プリンスホテル(撮影:菊池修)

【記者会見】

日本のHIV/エイズ対策 課題を指摘

岩本愛吉会長が日本記者クラブで会見

会見で日本のエイズ対策の課題を報告する
岩本愛吉会長（日本記者クラブ提供）



「垣根を越えよう」をテーマにした第24回日本エイズ学会学術集会・総会について岩本愛吉会長が11月9日午後、東京・内幸町の日本記者クラブで記者会見を行なった。厚生労働省エイズ動向委員会の委員長でもある岩本会長は、今学会の特徴などを説明するとともに、わが国およびアジアにおけるHIV/エイズの流行の現状について「決して楽観できるものではない」と述べ、マスメディアの継続的な取材を呼びかけた。

*

会見で岩本会長はまず、日本エイズ学会の使命について「エイズとHIVに関する諸問題の研究の促進、会員相互の交流および知識の普及と啓発をはかる」と説明し、今年11月1日現在の会員数が1911人に達していることを報告した。また、会員の専門領域が臨床、基礎、社会の3分野に大別でき、それぞれの分野で発表したり、議論したりということはあっても、分野間の相互の議論は少なかったことを指摘した。今回の「垣根を越えよう」もテーマの設定段階では、研究や活動の専門領域間に存在するこうした「垣根」の存在が主に想定されていたという。

ただし、会議の準備を進めていく中でテーマのコンセプトは深まり、心の中や人と人との間に存在する「垣根」、国境、民族、人種、性別にまつわる「垣根」、HIV陽性が陰性かで対応が異なる社会・心理的な「垣根」なども含めて取り組む方向性が打ち出されるようになった。プログラムの編成にもそうした考え方が反映されており、岩本会長はブレナリーセッションやラパトア報告などを例にあげながら、「それぞれの人が自分にとって何が垣根なのかを考え、それをもとにお互いを知り、情報交換することによって垣根を越えましょう」というメッセージが今学会のテーマには込められていることを報告した。

*

HIV/エイズの流行の現状については、動向委員会報告のデータなどをもとに説明し、わが国のHIV感染の広がりはいまなお、国際的な標準からみるときわめて低いレベルに抑えられているが、増加傾向は一貫して続いているとの見方を示した。また、人口規模が他地域に比べ格段に大きいアジアの流行については、感染の形態が多様であり、複雑な要素が絡み合っているとの見方を示し、今後の感染の拡大の可能性に強い危機感を表明するとともに、国境を越えた情報の交換や経験の共有が今後ますます重要になることを

強調した。

*

また、そうした内外の状況を踏まえ、岩本会長は日本の対策の課題として以下の4点を指摘している。

- (1) MSMでの集中感染がみられる。
- (2) 感染は若年層だけとはいえない。
- (3) 薬物使用者の間で感染が広がったらどう対応するか、議論をする場がない。
- (4) 現行の医療・対策等の多くに現在の当事者が抱える課題が反映されていない。

とりわけ、(3)については、内向きの現状を打破し、アジア諸国の経験に学ぶ必要があることを強調した。また、(4)では、「垣根を越えて、現在HIV感染が集中している男性同性愛者の声が対策に反映されなければならない」と述べ、対策にもっと当事者が参加できるようにする必要があるとの認識を示した。

(担当：宮田一雄)

注 11月9日の記者会見の様子は、YouTubeの日本記者クラブ・チャンネルで見ることができる。

『世界のエイズ流行
2010年版』発表
24日午後4時から
関係記者会見
会場ロイヤルルームで

世界のHIV/エイズの流行について、国連共同エイズ計画（UNAIDS）の最新報告書『世界のエイズ流行2010年版』発表にあわせ、国内でHIV/エイズ対策に取り組むNGOが11月24日午後4時から、第24回日本エイズ学会学術集会・総会の会場であるグランドプリンスホテル高輪B1F、ロイヤルルームで記者会見を行います。

報告書は、各国政府、NGOが提出した国別進捗報告（Country Progress Report 2008-2009）のさまざまなデータに基づき、2009年末の時点での流行

薬物依存とHIV

日時 11月24日(水) 17:30~19:30
会場 第3会場(B1Fロイヤルルーム)

近時、HIV関係者から「薬物」の話題を聞くことが多い。某俳優の事件などにその一端がうかがわれるように、日本社会での薬物使用への閾値は、相当程度、低下しているようだ。HIVにかかわる領域での薬物の話題も、そうした状況を反映しているのかもしれないし、あるいは薬物使用拡大のまさに現場の一つとなっているのかもしれない。

記者が属するMSMコミュニティも、薬物との“つきあい”には長いものがある。

ゲイのあいだでは1990年代の初期からRUSH(商品名)が、やはりそのころからポピュラーになった“オラオラ系”と称されるハードコアなセックスを盛り上げるものとして流行した。

いったん下がった薬物使用への抵抗感は、さらに次なるドラッグを求めさせ、2000年代にもはやされたのが「5-MeO-DIPT(5N,N-ジソプロピル-5-メトキシトリプタミン)」¹⁾、通称ゴメオだった。当時からオーバードーズによる事故が伝えられ、また酩酊感のなかでのセックスでセーフアセックスの実践がおろそかになることが言われた。そのころから顕在化したゲイのうつ病にも、脳に作用するゴメオの影響があるとも囁かれた。

薬事法や各種取締法規に根拠がなかったため“合法ドラッグ”とも呼ばれた、これら脱法ドラッグは、2005年前後にあいついで取締の対象となり、違法薬物となった。しかし、一度覚えたドラッグセックスへの志向は地下へ潜り、密売されるRUSHやゴメオ、さらに覚せい剤などを求めさせていると言われる。その多くはセックス時に使用され、結果としてHIV感染にいたることも多い。

こうした状況にたいして、「ダメ、絶対！」式の啓発があまり効果をあげえず、逮捕・収監者の再犯率も高いことは、さまざまな報告が伝えるところである。

今回のシンポジウムでは、薬物依存対策・支援の現場に立つパネルからの報告とともに、薬物依存・HIV感染の当事

者から経験が語られる予定であり、この問題に関心をもつ人に貴重な機会となりそうだ。

シンポジウムの座長を務める生島嗣さんは、ぶれいす東京の専任相談員として、多くのHIV陽性者と会うなかで、薬物依存の問題を合わせもつ人びとの増加に注目している。

また、おなじく座長の樽井正義さん(慶応大学)は、マレーシアにおけるHIVと薬物使用への調査経験をもち、今年のウィーン国際エイズ会議にも参加した。「人権、いまここで」をテーマとした今年のウィーン会議では、感染のリスクに直面しているマイノリティグループの人権問題を主題としたセッションのなかで、断然多かったのが、薬物使用者にかんするセッションだった。22を数えたという。

マレーシアの現存HIV陽性者数は2009年末で7万4千人を超え、その70~75%が注射による薬物使用者だという。またウィーンからもほど遠くない東欧圏、そして中央アジアを含む旧ソ連圏では陽性者人口は150万人。その6割が注射薬物使用者であり、薬物使用者の4人に1人がHIV陽性という。感染予防のうえからも、薬物使用者への働きかけが焦眉の課題であることは言うまでもない。

すでに薬物を使っている人に、「ダメ、絶対！」と叫び続けても、彼らの感染がやむわけではない。注射器交換や代替麻薬メサドンの提供などに象徴される「ハームリダクション」の普及が、薬物使用者間での感染拡大を抑える鍵となる。

マレーシアでは2005年に新たな国家戦略計画が策定され、副首相を議長にHIV/AIDS閣僚会議が設置。6つの戦略の筆頭にハームリダクションの実施を掲げた。薬物を刑事問題として扱うことを当然とする人びとに姿勢を転換させるには、現場に立脚したNGO/CBOからのたゆまぬ働きかけがあった。ハームリダクションの実践は、そうしたNGO/CBOとの連携によって実施され、現在、顕著な効果をあげている。

ウィーン会議においても、極刑の維持に固執しハームリダクション導入へ躊躇する政治姿勢にたいする批判と改革の提言が、「ウィーン宣言」として提唱された。

さて、日本の場合、注射器を使う方法以外での薬物摂取が主流のため、ハームリダクションが重要な議論のテーマとなることは少ないと思われる。しかし、その背景にある視点は、国の状況の違いを超えて、共有されるべきことである。

すなわち、薬物使用者を犯罪者として社会から遠ざけるのではなく、医療と支援を必要とする人として社会に受け入れるということである。これは薬物依存者にとどまらない、HIVに取り組む根幹の考え方でもあるだろう。

近時、どのような社会問題においても言われる「社会的包摂」の課題の、そのなよりの実例を、薬物依存とHIVの現場において見ることができるだろう。(担当:永易至文)

と対策の現状を、各国、地域、世界、それぞれのレベルで整理しており、これまで以上に精度の高い推計と分析になっていることが期待できます。会見はエイズ&ソサエティ研究会議、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、アフリカ日本協議会など、HIV/エイズが提起する問題に取り組むNGOが中心になって開催。エイズ予防財団による報告書概要の日本語訳も資料として配付される見通しです。会見に関する情報は

http://asajp.at.webry.info/201011/article_3.html をご覧ください。

シリーズ GrassRoots^さの^ね東西南北！ ~NGOブースからの紹介1

一般公開エリアであるグランドプリンスホテル高輪1階の「福」の間は、NPO/NGOのブース会場にあてられ、全国でHIV/エイズに関連した活動を実施しているNPO/NGO約20団体が展示ブースを出しています。また、30坪のスペースの一部にはイスやテーブルが置かれ、ちょっと休憩できるようにもなっているので、期間中は参加者の情報交換や交流の場としても活用されそうですね。展示参加NPO/NGOのいくつかをシリーズで紹介します。

支援者研修用の最新DVDも上映

【ぶれいす東京】

東京・高田馬場にある特定非営利活動法人ぶれいす東京のオフィスでいただいたパンフレットを開くと、ブルーの文字でこう書かれていました。

「自分らしく生きることを応援します」

簡潔ですね。ぶれいすはPLACE。場所という意味の英単語であると同時に《Positive Living And Community Empowerment Tokyo》の頭文字でもあります。池上千寿子代表によると、《Positive Living》が自分らしく生きること、《Community》は地域共同体のようなイメージがありますが、HIV/エイズ分野では、地理的な概念よりも、関心や利害を共有するグループといった結びつきが重

視されるようです。《Empowerment》は「内なる力を引き出し可能にすること」を意味します。

Empowermentが必要なときに、だれかがいてくれたり、どこか訪ねて行ったり、電話をかけてみたりするところがあるといいですね。応援の中身はいろいろです。人によっても必要とするものが異なります。《ぶれいす=場》というコンセプトは、治療が進歩していることで、HIVに感染して長く生きることが期待できるようになった人、HIV感染の高いリスクにさらされる可能性のある人の数が増え、ニーズも多様化していくであろうと考えられるだけにますます重要です。

ぶれいす東京の活動の柱は「直接支援」「予防啓発」「研究・研修」ということで、具体的にはどうということなのと、もう少し知りたくなった人はぜひブースをのぞいてみてください。HIV陽性者およびその周囲の人を対象にしたさまざまなサービスの案内や活動について紹介する資料が用意されています。また、地域の支援者の研修用に開発されたできたのDVD『対応する際に知っておきたいこと 地域におけるHIV陽性者の支援』も上映されます。



各団体のパンフレットなど資料も多数

学会の場でGIPAを実践

【HIV陽性者支援スカラシップ委員会】

ニューズレターの第2号でも紹介したHIV陽性者支援スカラシップ委員会のブースも登場します。陽性者支援スカラシップは2006年に第20回日本エイズ学会学術集会・総会が東京で開かれた際に創設されました。HIV陽性者当事者団体および支援団体である社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、特定非営利活動法人ぶれいす東京の3団体が委員会を構成し、「全国にいるHIV陽性者にとって

経済的や地理的、また心理的に参加しにくい学会の場に、少しでも参加する機会を拡大する」との目的のもとに共同事業として取り組んでいます。また、厚生労働省、エイズ予防財団、日本エイズ学会、日本製薬工業協会が後援しています。

ブースでは過去4回の実施報告書を希望者に配布するという一方で、国際的にもHIV/エイズ対策の重要な原則となっているGIPA（HIV陽性者やHIV感染の高いリスクにさらされたコミュニティのより積極的な参加）について認識を深めるいい機会にもなりそうですね。委員会では継続的なスカラシップ実施のための資金を支える寄付への協力も呼びかけています。

【社会福祉法人はばたき福祉事業団】

被害者みずから救済事業を行なうために薬害エイズ被害者の救済事業や薬害再発防止を目的とした任意財団として、薬害エイズ訴訟の和解成立後の平成9年4月に発足。2006年8月には被害者を永続的に支援し、安定した事業基盤を確立するために社会福祉法人として認可を受けました。患者が主体的に医療に参加し、自己決定できる患者参加型医療を提唱し、実践しています。

【日本HIV陽性者ネットワーク ジャンププラス】

HIV陽性者が集まり、つながり、力を合わせて、自分たちがあたりまえに生きていくことのできる社会をめざす当事者組織。医療、福祉、保健、政治など幅広い分野の情報提供活動、HIV/エイズへの偏見や差別をなくし、HIV陽性者であることから生じるさまざまな不利益をなくすよう社会に働きかけるアドボカシー活動、国内外のHIV陽性者グループと交流や情報交換を行うネットワーク事業などに取り組んでいます。

編集を終えて

いよいよ開幕です。ニューズレター編集班も私と永易至文デスクの2人が23日から会場に泊まり込みの取材・編集体制に入りました。撮影取材は写真集「Monster」で有名な写真家の菊池修さんが担当。さらにサンスター広報室の吉田智子さんが勤務を終えた後、夜間の編集作業のお手伝いに駆けつけてくれます。頼りない編集長を少数精鋭のプロ集団が、ま

さしく「垣根を越え」て、支える構図ですね。ただし、もうひとつ、学会参加の皆さんの温かいご支援とご協力がなければ、ニューズレターは成立しません。3日間、どうぞよろしくをお願いします。（編集長・宮田一雄）

教育書の出版社に勤めていたころ、夏休みに教師の集会へ書籍販売に行くと、先生たちが分科会の報告や話題をその日のうちにガリ版でニュースに作って、夕方には配っていました。学級通信で鍛えた日本の教師のお家芸

だったのかもしれませんが。これからの3日間、エイズ学会でも日報をお届けします。ご注目、ご愛読のほどをお願いします。海外の学会などでも、ニュース制作体制が組まれているそうです。さらに今回は岩本会長のリーダーシップのもと、プレナリーセッションやラパトワセッションなど、新しい（海外では普通の）システムが導入されています。24回学会が一つの跳躍台となることを、スタッフとして陰ながら期待し、祈っています。（永易至文）